

講演概要

津波被害の激しかった地域で300人以上の傷ついた方々のおもかげをボランティアで生前に近いお顔に復元された笹原さん。安置所で、ある男性から「4人の子どもたちにお母さんの手を握らせて最後のお別れをさせたい」と望みを告げられます。それを叶えるため、被災から一ヶ月以上経ち、おもかげをなくしていた奥様の笑顔を3時間かけて復元されます。遺影の写真と見比べ、奥様にしかない笑い皺を辿りながら……。復元のと、男性は、にっこり微笑んでいて奥様の手を握り奥様の名前を呼んで涙を流し、子どもたちも笑顔のお母さんと最後のお別れをします。笹原さんは、この死を受容する瞬間が次に歩み出すためには欠かせず、それを理解する人たちの存在が必要だと話されました。

最近、その子どもたちが「寂しくなったらお母さんが夢に出てきてくれる」という話をしてくれます。お母さんの存在が、今の家族を支えている。死を迎えてもその関係性は全く変わっていない。笹原さんは、「悲しみを忘れようとしなくてもいい」とおっしゃいます。

悲しみと向き合うことは、亡き人との思い出を見つめることであり、そして自分自身を見つめ直すことにつながります。笹原さん自身、過去にお子様を亡くされ、その時にたくさんの人に支えられた経験から納棺師になられ、「私には、亡き人のことを忘れないでいてもらえるようにお手伝いをする使命がある」と思いを話されました。

「どれだけたくさんのかをしたかではなく、一つひとつのことにどれだけ自分が心を込められたか」

笹原さんは、苦しいなと思ったときにマザー・テレサのこの言葉を思い出すそうです。

ご自身が復元ボランティアの現場で大きなショックを受けているときに、現地のおばあちゃんに「ずっと思っているからね」と、大事に大事に寒さで冷たくなった手を握ってもらったというお話もありました。その手の温もりにボロボロ涙が出てきて「少しだけ泣かせてください」とお願いしたこともあった。たくさんの人に支えてもらいながら、自分という存在をどう活かしていくのか、それが人生の課題だとも話されました。

「戦後、死は生活の中から見えなくなってきたが、本当は一人ひとりの生活の中に存在している」「人はだれでも死を迎える。死を考えるのが怖いときは、生きることを考えてほしい。生きることを考えることは、死を考えることと同じだから。人はいつ死を迎えるかわからない。だからこそ、今日何をすべきか考えて行動しなければならない」と話されました。